

「どうすればできるだろう」という “チャレンジ”

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター 研究員
第24回チャレンジ賞 受賞者 森 敦史

この度は、チャレンジ賞をいただき、大変うれしく思っております。ご推薦くださった皆様、応援してくださった皆様、そして審査に携わってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

先天性盲ろう者として、これまでさまざまなことに挑戦してきたことは確かですが、ご推薦のお話をいただいた時には、正直「こんな私でいいのかな？」と思いました。それでもせっかくの機会だからとお引き受けしたところ、まさか受賞できるとは思っておらず、自分でも驚いています。

受賞が決まった頃は仕事が立て込んでいたこともあり、皆様からのお祝いにお礼を申し上げることで精いっぱいでした。職場の方から「チャレンジ賞を受賞されたんですね」と言われた時に、ようやく、この賞の重みを実感したように思います。

1. 私のこれまで

私は、生まれた時から視覚と聴覚に障害がある「盲ろう者」です。普段は、相手の手話に軽く触れて読み取る「触手話」や、点字ディスプレイなどのICT機器を使ってコミュニケーションを取っています。最近ほとんど使

う機会がありませんが、「指点字」もできます。

3歳から難聴児の通園施設に通い、そこで初めてコミュニケーション方法として、手話やサインを覚えました。小学生の頃はろう学校で手話を中心に学びましたが、点字による日本語の読み書きの学習の必要性等から、小学5年生の時に、筑波大学附属盲学校（現・視覚特別支援学校）へ転校しました。

盲学校では、机上での勉強だけでなく、街歩きや寄宿舎での生活、友人との交流、普段なかなか触れないようなものの触察体験など、さまざまな経験をしました。点字と墨字の五十音を並べた自作の「五十音ボード」を使い、一人で買い物をするにも挑戦しました。こうした経験が、後に「できないと決めつけず、まず方法を考える」という自分の姿勢につながったのだと思います。

2. 約20校に問い合わせて大学へ

私にとって大きなチャレンジの一つが大学進学でした。高等部の頃、将来は盲ろう者の役に立つ仕事がしたいと考えていました。それでも、当時はまだ将来の仕事について具体的なことはイメージできず、「盲ろう者が安心して働ける場所がもっとあればいい。いつか自分盲ろう者のための作業所を作れたらいいな」と、漠然と考えていました。そのためには、まず社会福祉について学ぶ必要があると思います、大学進学を決意しました。

しかし、盲ろう者が一般の大学で学ぶには、視覚障害への配慮だけでなく、授業の内容等を理解するための触

手話などによる通訳（情報保障）も必要です。そこで、「盲ろう者でも受験できますか」「入学したら通訳をつけてもらえますか」と約20校に問い合わせ、交渉しました。しかし、受験を認めてくださったのは2校だけでした。不合格も経験しましたが、3回目の受験で第一志望の大学に進学することができました。

大学では、触手話通訳やパソコン通訳、資料のテキストデータ化や点訳などの支援を受けました。また、学生の皆さんにも通学時の誘導をしてもらったり、手話サークルで活動したり、一緒に昼食や外食、カラオケに行ったりと、普通の大学生と同じような時間を過ごさせてもらいました。

「盲ろう者がカラオケ？」と思われる方もいるかもしれませんが、私自身も、最初から楽しみ方が分かっていたわけではありません。それでも友人と一緒に経験してみることが、残存視力や残存聴力を使い、雰囲気を楽しむといったような「自分なりの楽しみ方」を見つけたことができます。この経験から、障害があるからできないのではなく、経験してみなければ、自分に何ができるのかも分からないということを学びました。

また、少しずつ自分でできることも増やしました。例えば、駅員さんをお願いしたい内容をカードにまとめ、それを見せてサポートしてもらいながら、一人で鉄道を利用するようになりました。支援者がいない時にはタクシーを利用するなど、自分なりの方法を見つけていきました。その結果、友人との飲み会などにも参加しやすく

なり、自分の世界が広がっていききました。

3. 大学院から仕事、そしてICTへ

大学卒業後は、主に視覚障害者・聴覚障害者が学ぶ筑波技術大学大学院の情報アクセシビリティ専攻に進学しました。コミュニケーションや周囲の人たちの支援を重視し、私は主に聴覚障害学生が学ぶ天久保キャンパスに在籍しました。盲ろう学生の受け入れには前例が少なかったものの、先生方と相談しながら、点字ブロックの増設や通訳、触図の作成など、必要な環境を整えていただきました。

大学院では研究だけでなく、友人と夜遅くまで飲み歩いたり、バーベキューをしたり、友人の家に泊まったり、バイクの後ろに乗せてもらったりと、これまであまり経験したことがないようなことにもたくさん挑戦しました。人生で一番楽しかったのではないかと思うほど、充実した学生生活でした。

一方で、もちろん勉強や研究にも真剣に取り組みました。大学院では「先天性盲ろう青年におけるICT活用と活用に向けた支援の可能性」というテーマで論文を執筆しました。参考文献を読み、研究結果を整理し、文章にまとめていく作業は決して簡単ではありませんでした。締め切りが近づいてからは、友人たちと遊んでいた時とは一転して、同級生と一緒に夜遅くまで、時には徹夜をしながら最後の追い込みをしていました。

盲ろう者として研究をするためには、文献を読んだり、

文章を確認したりする際にもさまざまな工夫や支援が必要で、それでも、自分自身の経験を研究としてまとめ、論文という形にできたことは、その後の仕事や現在の研究にもつながる大きな経験になりました。

大学院修了後は、これまでの経験を次の世代の盲ろう者にも活かしたいと考え、筑波技術大学に就職しました。最初は事務職として広報などを担当し、上司や同僚との連絡にチャットシステム (Teams) を活用したり、必要な支援を自分で資料にまとめたりしながら仕事をしました。現在は研究員として、盲ろう者の ICT 活用に関する研究に携わっています。

現在取り組んでいる研究の一つが、日本財団電話リレーサービスとの共同による「盲ろう者向け電話リレーサービスシステム」の開発です。ICTの発展によって、コロナ禍には在宅勤務も経験しました。パソコンや点字ディスプレイ、視覚障害者向けのスマートフォンとさえいえるブレイルセンスなどの技術が、盲ろう者の生活だけでなく、働く可能性も広げてくれることを実感しています。

4. これからも挑戦を

振り返ってみると、私のこれまでの挑戦は、決して一人で成し遂げたものではありません。家族、教員、友人、支援者など、多くの人に支えていただきました。

私は「自立」とは、誰の力も借りずに一人で何でもすることではないと思っています。必要な時には人の力を借りながら、自分で選び、自分なりの方法を考えて行動

することも、自立の一つの形ではないでしょうか。

これからは人的な支援だけでなく、ICT 機器や補装具など、「もの」の可能性にも目を向けていきたいと思っています。新しい機器が出ると、盲ろう者として実際に使えるのか、自分で触って確かめることもあります。ユーザーだからこそ分かることを発信し、より使いやすい環境につなげていきたいと考えています。

2027年度には、スイスで開催される「世界盲ろう者大会」への参加を予定しています。採択されれば盲ろう者の ICT 活用と就労について発表する予定で準備を進めています。海外の盲ろう者の生活や支援についても学び、日本の盲ろう者のために活かしていきたいと思います。

私にとって「チャレンジ」とは、何か特別なことをすることではありません。「やってみたい」と思った時に、「盲ろう者だから無理」と終わらせず、「どうすればできるだろう」と考えてみてください。もちろん、挑戦して失敗することもあります。それでも、やってみなければ分からないことがあります。そして、やってみることで、自分の世界が少し広がるがあります。

今回いただいたチャレンジ賞を励みに、これからも周囲の人の力を借りながら、さまざまなことに挑戦していきたいと思っています。そして、自分が得た経験を次の世代の盲ろう者へつないでいければと思っています。

改めまして、これまで私を支えてくださった皆様、そしてこのような素晴らしい賞を贈ってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。